

発掘

伊藤
整

新潮社版

発掘

昭和四十五年一月二十五日 印刷
昭和四十五年一月三十日 発行

定価 五五〇円

著者 伊藤 整

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(03)260-1111
振替東京 八〇八番
郵便番号一六二

(乱丁・落丁本はお取替えいたします)

発

掘

土谷圭三は、研究所からすぐ姉の病氣見舞の旅に出かけるつもりで、旅行鞆を持つて来てゐた。その黄色い中型の革鞆は、彼の事務机の横、明るく大きな窓の下に置いてあつた。この研究所は、新しい意匠の洋風建築で、冷房装置もつくはずなのだが、この夏にはまだその費用が取れなかつたので、室には夏の熱氣がこもつてゐた。しかし、東京都の西方の郊外にあつた飛行場あとの国有地に作られたこの研究所は、敷地を広く取つてあるので、風はよく通つた。半透明な飴色の巻き上げ式のブラインドをふくらし、南風が窓から入り、北側の廊下へ、鎧戸になつた扉を通じて出てゆく。

今朝早く、姉が危篤だといふ電報が入つたときから、彼は姉の死を予想してゐた。一週間ほど留守にする予定で、彼は副所長の坪内与作や資料部、図書部の主事などと事務上の打ち合せをした。国立の諸大学が休みになつたあとで、

文部省も半ば休暇に入つてゐるやうなものであり、官庁関係の面倒な事務手続きは起らない時期であつた。彼は大軌の一番下の引出しに鍵をかけ、机の上を片附けた。喪服の必要が起れば、電報を打つて飛行便で送らせるやうに妻の芳子に言つてあつた。下着類は数枚その鞆に詰めてあるが、足りなくなれば行つた先で買ふことにした。甥夫婦に渡す見舞の金も支度してあつた。あとは、夜の八時に発つ飛行機に乗るまでの時間を適當に過すことを考へればいいだけであつた。三時を少し過ぎた時刻であつた。

そのとき、卓上の電話が鳴つた。

「所長に面会の方です」と受附の女の子が言つた。「女の方で下館といふお名前です。はい、はい、下館露子さんといふ方です。」

土谷圭三はすぐ、その人の年はいくつぐらゐるか、と訊き返さうとしたが、やめた。明治文化関係の資料を調べに紹介状などを持つて、直接彼のところへ来る未知の来訪者が時々あつた。しかし彼は、その露子といふ名前を聞いたときから、これは村井露子かも知れぬと考へた。六十五歳になる姉が危篤だといふことが、郷里や若い時代の記憶へ彼を呼び戻してゐたのかも知れなかつた。

「どういふ御用か伺つて見なさい」と彼は言つた。間を置いて受附の浅木といふ女事務員が言つた。

「ずつと昔に先生を存じ上げてゐた方で、お目にかかりたいと申してゐます。」

その声には何かを気づかつてゐる軽い緊張感があつた。

やつぱり村井露子だ。土谷圭三の心のずつと奥の方に隠れてゐた、暗い小さな泉に、突然日光が射し込み、きらきらと光を反射しながらそこに波が立つた。だがその上を覆つてゐる厚い岩の層のやうな現実処理の意識が、彼の動揺する感情にしつかりと蓋をした。露子は彼と六つ違ひだから四十八歳になる筈であつた。その露子が来たといふのは、面倒な話を持ち込まれることにちがひなかつた。あの時の子供はどうなつてゐるのだらう、と彼の気持はその一点に絞られて行つた。

「お通しするやうに」と土谷圭三は言つた。

彼は自分の年齢と身体を振りかへるやうに考へた。髪はほとんど白くなつてゐるけれども、顔の色艶もよく、骨組みのしつかりした痩せ気味の身体は衰へのきざしを見せてゐないことを彼は知つてゐた。長い間国立大学の教授をして来て、新設された明治文化研究所の所長になつてから二年になる。自分には円熟した気品といふべきものが備はつてゐることも知つてゐた。

露子と逢ふのは、もつと余裕を置いてのことであつてほしかつた。いま玄關から長い廊下を案内されて露子がここ

へ来るまでの二三分の間に、二十五年間の気持や立場の変動に應ずるだけの心構へを作るのは不可能であつた。雪崩のやうな大きな変化の予想が、昔の露子の白い頬と、うす赤い色の唇の記憶の上に落ちかかつて来た。その露子が、どのやうな年月の侵蝕を受けた容貌を彼の前に運んで来るかと考へて、彼は息を飲むやうな気持になつた。女が五十歳に近くなつて昔の愛人に逢はうとするのは、きつと何か面倒な、思ひあまつたことがあるにちがひなく、彼の今の家庭をおびやかすものになる可能性があつた。夫はどうしたのだらう？ 露子の夫が死んだのかも知れない、といふ考へが彼の頭にひらめいた。

扉を叩く音がして、土谷圭三の秘書を兼ねてゐる事務員の佐藤鳥子が入つた。佐藤鳥子のすぐうしろに続いて入つて来た女は、横顔を見せて扉をていねいに締めるやうとしてゐた。その扉は自動的に締まるのだから、女はかへつて間違ついたらしく、扉の締まるのを確かめるに手間取つた。白い夏の着物の上に、近年の流行である短い羽織を着てゐた。その羽織は何か絹のやうな透いた地のもので、茜色だつた。

佐藤鳥子が立ちのいたとき、女はこちらを向き、黒い目で短い間強い視線を送つたが、その顔を見られるのを怖れるやうに深く頭を下げ、丁寧な礼をした。

土谷圭三は自分の席に立ち、あたり前の口調で言つた。

「さあ、どうぞ、こちらへ。」

佐藤鳥子は出て行つた。秘書の鳥子のゐる事務室は、同じ廊下に面した隣の室であるが、そこは厚い壁で隔てられてゐるから、こちらの話声は届かない筈であつた。

一女は顔を上げた。土谷圭三は机を前にして立つたまま、女と顔を見合せた。躊躇ふやうな、怖れるやうな、また恥ぢるやうな表情が忙しくその白い顔を横切つた。これが露子だらうか？ あゝ露子だらうか？ 彼は見定めることができず、狼狽した。二十五年の時を経て逢つた女を、その人とすぐ見分けることができなくても当然であつた。しかし、そこに立つてゐる中年を過ぎようとしてゐる肥り氣味の色の白の女の顔は、あまりに曾ての露子と違つてゐた。土谷圭三の狼狽はいよいよ大きくなつた。その女は昔の露子の母に似てゐた。また一瞬間の後には、それは露子の姉の春子に似てゐた。

そのとき、女の黒い眼に、きらりと涙が浮び、女は言つた。「お久しうございます。露子でございます。」

それは軽く金属的に響くあの露子の声であつた。そしてやつと彼は、いま自分の前に立つてゐるのが村井露子であること、肥つたためか、年齢のために、吊り氣味であつた目が柔和になり、また腫れぼつたい上目蓋に押し下げられ

て目が細くなつてゐるのが、大きな変化だと分つた。口紅をつけてゐる口は大きくなり、下唇が少しつき出て、顔の表情全体がゆるみ、一まはり大きな厚ぼつたい顔になつてゐた。しかし色は昔よりも白く、細かな皺が目尻についてゐることを除けば、ひどく衰へてはゐなかつた。彼の年齢の男に分るやうな成熟した女の魅力があつた。しかしそれは、すぐ老年の衰へに変わりさうな不安定なものであつた。土谷圭三は、自分のぶしつけな目つきを詫びるやうに言つた。

「本当にお久しぶりです。まあどうぞ、お掛け下さい。」

露子はハンカチを出して、手早く目の涙を拭つてから、彼と向ひ合つて窓際にある客用の肘掛け椅子に坐つた。するとまた、彼の胸のずつと奥の方で、暗い岩の間の泉のやうなものが波立ち、きらきらと光をかき散らした。彼はまた重い蓋でそれを心の奥に閉ぢこめた。その上で、何でもなない旧知の人に逢つたときの愛想のよい顔を作つた。五十歳をすぎた生活者の土谷圭三は、その短い時間にも、今の露子の姿から、さまざまな人生の報告を引き出してゐた。

彼女の歩き方、坐り方は、あまり苦しくない家庭の主婦が、何十年かを家事や接客の間に過して来て、自然に身につけたものであつた。その目は探索的には動かず、安定した内輪な表情を持つてゐた。その白い夏の着物は新しいも

のとは思はれなかつたが、その茜色の夏羽織は、この頃支度したもののやうであつた。

「ちつともお変わりもなく、お元気でいらして、何よりでございます」と露子が言つた。

「いや」と土谷圭三は白い、油をつけない髪を撫でて、笑つた。「こんな風に白くなりました。まあ年相応なんですね。」

それ以上何か露子の方のことを訊ねるのは躊躇われた。どんな事情が露出するか分らなかつた。

「どうして僕のことがお分りでした？」と彼は、自分の言葉を他人行儀だと思ひながらたづねた。

「時々、お出しになつてゐる書物のことでも分りましたし、それにテレビでお目にかかつてゐます。」

さう言つたとき露子の表情は、打ちとけたものになり、数日前に彼に逢つたのだといふ目つきをした。それが土谷圭三をまた狼狽させた。彼は近代文学辞典の編纂者として名を連ねたり、文学史を書いて出版したりしてゐた。その上、この頃は、テレビジョンで受験生相手の連続講義を受け持つてゐた。

「大学の方はおやめになつたのですか？」

「いや、兼任で、大学にも席はありますが、こちらが主な仕事なんです。講義よりも自分の研究に力を注げると思つ

て引き受けたんですが、事務や人事関係に時間をとられて困つてゐます。自分用の車があるといふぐらいが僅かな取り柄です」と彼は仕事のことで打ちあけた言ひ方をした。

露子の夫のことを訊くべきであつた。しかし彼はそれを切り出すことができなかった。露子もまた、彼の家庭のことに触れようとしなかつた。二人とも困つたやうに口をつぐんだ。すると、彼とかつての愛人との間に、大きな空濠のやうなものが口を開いた。それは下りて行つて這ひあがることも、飛び越すこともできさうのないものだつた。どちらかが手を出して相手の飛び越えて来るのを助ける気配も生れなかつた。若さの弾力もなく、目をつぶつて足下の裂け目を相手の方に跳ぶだけの執着も失はれてゐた。そしていまの年齢では無理なことをして傷つけば恢復は難かしいのだといふ理解が、暗黙のうなづき合ひのやうにそこに漂つた。

普通の社交生活で旧知の人間が逢つたときに使はれる挨拶、交はされる訊ね合ひの言葉を、土谷圭三は搜してみた。だがどの言葉も差し障りがあつた。お子さまは、御主人は、お住ひはといふ言葉は、どれも危険であつた。そして黙つて向ひ合つてゐると、そのまま二人は白い眼でにらみ合ふ敵になりかねない不安があつた。

官庁の責任者といふ彼のいかめしい地位を思はせるこの

室では、露子もなにも言ひ出せないのかも知れなかつた。

「姉が病氣になりまして、今夜私は出かけなければならぬ所です」と圭三が言つた。そのとき、彼の視線の走つたところにある黄色い革靴に、露子も目をやつた。

「まあ、牟礼さんのお姉様がですか？ ひどく悪いんですか？」

「ええ、もう大分前から中気で寝てゐたんですが、危険になつたといふ電報が入つたものですから。」

「あのお姉様はお幾つでしたかしら？」

「六十五です。」

「まあ、そんなでしたか。あなた様には、あの方は親御さんのやうなものでしたから」と言つて、露子はふつと口をつぐんだ。

そこもまた袋道であつた。圭三は十四五歳のころに父母を失つた。彼が、同じ村の遠縁に當る牟礼家へ嫁いだ姉の手もとで、姉の子のやうに育てられ、その家から学資を出してもらつて教育を受けたことを露子は知つてゐた。圭三が大学の助手になつて夏休みに村に帰つたとき、隣の町で酒場の給仕女をしてゐた露子と親しくなり、露子が妊娠したのだつた。そのことが分ると、土谷家の再興を圭三に託してゐた姉は強く二人の結婚に反対した。露子は貧農の子で、教育も十分に受けていなかつた。圭三には、大学の主

任教授の姪だつた芳子との結婚話が起つてゐた。その話はこはれば、彼に予定されてゐた大学の講師の席が失はれる可能性があつた。一時は露子のことにこだはつてゐた彼も、あと始末を姉にまかせて、東京へ帰ると、それつきり連絡しなくなつた。露子は彼の姉の出した金で、別な町の産院で男の子を産んだ。その子は生れ落ちるとすぐによそへやられた。姉はその子をもらつた家と、ずっと薄い交渉を保つてゐたやうだが、圭三には何も言はなかつた。

露子はまた酒場の女の生活をつづけてゐたが、数年後に、その美貌に引きつけられ、客から求婚されて、結婚することになつた。彼女の夫は、しつかりした勤め人だといふことを圭三は聞いてゐた。その何年か後に、東京にゐる古い友人から得た間接の消息で、露子は何人かの子の母親になつて東京に住んでゐるといふことを、彼はほんやりと記憶してゐた。圭三は大学に残り、教授の姪の芳子と結婚し、そして学者の道を辿つて來たのだ。彼と芳子の間には子供がなかつた。

露子も固い表情から抜け出せずにゐた。何を云ひ出して、過去の思ひ出につながるものはみな棘があつた。その棘のある杵を彼の方から越えて、過去のことへ話を持つて行くことが露子に示し得る優しさだと圭三は感じた。

「東京へ住んでから、もう長いことになるんですか？」

「もう三十四年になりますの。」

言葉のやり取りにつきまとふこの鄭重さは冷酷であつた。露子の夫は生きてゐるにちがひなかつた。圭三は、他人の妻である旧知の女性と話をしていると云ふ形を、どうしても変へることができなかつた。しかしいま、彼の目の前に、太り気味の身体を白い薄い夏の着物に包んで坐つてゐる露子は、話が過去のことに戻つて行くにつれて、もとの露子その人に変化して行つた。二重顎になりかかつた大柄な白い顔の中から、瘦せた、目の大きな若い露子が姿を見せて来た。その声の、軟かな金属的な響きと、ときどき下から盗むやうに送る目なざしとは露子その人であつた。露子は、その中年女の身体の中に身をひそめて、確かにそこにゐた。「何時の汽車でお出かけですか？」

「飛行機で行きます。七時までにはバスに乗ればいいんです。少しまだ早いですけど、もう一軒用がありますから、何でしたら御一緒に出来ませうか？」

「ええ、でも、よろしいんですか？」

場所を変へれば、露子も、もつと楽にものが言へる。そしてその持つて来た用件を切り出すだらう。それに、今まで何度か姉にたづねようとして、遂に機を失つてゐたあの男の子のことを、露子から聞き出せるとすれば、それは今であつた。また、露子の夫が健在ならば、彼を訪ねて来た

のは、その子のこと以外にはない筈だ、と彼は今では感じてゐた。

圭三はブザーを押した。そして入つて来た佐藤鳥子に、運転手の山口に車を玄關へまはさせるやうに言つた。佐藤鳥子が去つてから、彼は氣がついて隣の事務室へ行き、副所長の坪内与作に、客が来たから送りがてら早目に出ると言つて別れの挨拶をした。だまつてゐると、坪内や主事たちが、珍しく長い休みをとつた彼を玄關まで見送つて出るかも知れないと思つたのだ。そして彼は開襟シャツのまま、上着を腕にかけ、靴を手にして露子をうながし、すぐ玄關に出た。山口が車庫から出して来た所長用の車がちょうどそこに着いたところだつた。

綺麗に掃除され、座席にカヴァーをかけた少し古風な大型の車に、制服の運転手が帽子を脱いで開いてゐる扉から先に乗るやうに言はれたとき、露子はためらつて赤くなつた。そして後から乗つた圭三からできるだけ離れてゐようとするやうに、窓際にびたりと身を寄せた。運転手の山口は、戦時中に下士官をしてゐた中年の無口な男で、この新しく出来た研究所の權威を、自分の態度で支へてゐるといふやうな構へがあつた。きまつた時間に、大学や自宅から所長を送り迎へしてゐる山口は、所長の土谷圭三が厳めしく構へることが氣に入るやうだつた。圭三はそれを押ししつ

けがましく思つたが、大学教授としては享受できなかった送り迎への便宜に慣れるに従つて、車に乗るときは少しづつ山口の予期してゐるやうな態度をとるやうになつた。

露子は、車が旧市内の雑沓のなかで遅れがちになつた頃、やつと話題を見つけたといふ風に、明治文化研究所の組織のことを訊ねた。それは、明治以後の日本近代文化を系統的に調査し、資料を集め、記録と研究をするといふ目的で出来た機関だつた。研究員は大学の歴史学科と文学科の協同のスタッフで、現職の教授の兼任が多いこと、今のところ近代文学史専攻の圭三が所長で、歴史学の助教授である坪内与作といふ博士が副所長をしてゐること、實際は近代文学や近代史の図書館なので、二階がその閲覧室になつてゐることなどを彼は説明した。

研究所としては、大学附属の科学系統のものに較べて、予算も少く、貧弱な内容のものに過ぎなかつた。だが、その建物の設計が思ひ切つた近代的なもので、建築デザインの賞に入り、模範的な新建築として何度か写真が新聞や雑誌に掲載されたため、世間ははじめてさういふ施設が出来たことに気がついたのだつた。そして露子自身がこの研究所に圭三を訪ねて来る氣になつたのも、多分、その新式の建物の所長が圭三であるといふことを何かで読んでゐたために違ひないのであつた。

圭三は山口に言つて、下町にある空港ターミナルへ車をつけさせた。車がその建物の前にとまつても彼は傍のドアを開かず、山口が下りて、外からあけるのを待つてゐた。

前に一度圭三が自分でドアを開いたとき、山口は危険だからとて彼に注意したことがあつた。露子が下りるのを待つて、彼は、帽子を脱いで立つてゐる山口に、これで帰つていい、あと一週間ほどは旅行をする、と伝へた。

そのターミナルの建物は三階から上がホテルになつてゐる大きなもので、一階は待合室兼ロビーと事務室、二階はレストランになつてゐた。

「いいんですか、お急ぎにならなくつても？」とそこへ入るドアを押してやりながら圭三が言ふと、露子は軽く、

「いいのよ」と彼の顔を見上げて言つた。

その簡単な言葉のぞんざいな感じが、急に二人を昔の親密さの中に引き戻した。露子の家庭が作られる以前の、また圭三の地位と家庭が作られる以前の二人として、突然彼は露子とそこにゐるのだ。さう思ひながら彼は、自分の前に立つて、その広い、天井の高い待合室を眺めてゐる露子を背後から見た。ぴちつと身体を締めつけるやうに着た着物は、短い羽織から出たところで、露子の腰や太股の形をありありと見せてゐた。不用意に彼の目にさらしてゐる露子の後姿は、その性の初めての経験として彼を受け入れ、

少女が女になるための血をにじませ、そして子供が物の味を知るやうに性の喜びを知つた肉体であつた。またその結果として彼の子供を産んだ肉体であつた。そして圭三が怖れと恥らひの中に、三十近くなつてから初めて女の性に触れたのもその身体であつた。それを今、現実のことと考へるには、あまりに遠すぎた。町はづれの、日の光の洩れ落ちる明るい林の中で初めて行はれたあの性の行為は、ほとんど幻に似て、かげろふの立つ春の野の子供のままごとのやうに思はれた。しかしその同じ女の肉体が白い薄い着物に包まれて彼の前にあり、その女の産んだ子が二十四五歳の青年としてどこかに生きてゐるとすれば、その二つの現実が結びつく遠い一点に、彼と露子の間に起つたことは、動かしがたい事実として今も存在してゐるのだつた。

彼は露子を誘つた。

「二階のレストランへ行つて見ませう。」

レストランは空いてゐた。彼は壁に沿つた小さな卓に露子と向ひ合つて坐つた。卓に肘をつくと二人の顔は一尺あまりの距離にあつた。白っぽい間接照明のせゐで、露子の顔はずつと若く見えた。その目つきは大胆になつてゐた。かすかに彼は露子が酒場の給仕女だつたことを思ひ出し、かういふ場所では落ちつきを取りもどせるのかも知れない、と考へた。

「お腹は空いてないけど、お食事を一緒にしてみたいの、私」と露子が言つた。そして彼女は、やつとここへ来て笑へるといふやうに白い歯を見せた。その言葉は、半ば方言で、昔の露子の言ひ方だつた。

圭三が簡単なコースの食事を注文したあとで、露子は言つた。

「お姉さまは本当にもういけないんですか？」

「さうらしいんだ」と言つてから、圭三は自分の言葉づかひもまた、近づいて来る露子を防ぎ得なくなつてゐるのを知つて、うろたへた。彼はつづけて、彼の言葉づかひが促してゐる素直な調子に従つて言つた。

「で、なにか特別な話があつたの、今日は？」

「お話もあるんです。でもテレビであなたのお顔を見てゐるうちに、私、あんまり年をとらないうちに、あなたに逢つておきたいと思つてゐましたの。でも、もうずるぶる年はとりましたけど。」

圭三はだまつて露子の顔を見た。露子が彼の視線をとらへた。すると、二人が昔のうひうひしい気持に引き込まれかかつてゐるのが分つた。それが分り合つた瞬間に、恥らひが霧のやうに二人の間に立ちこめ、二人は同時に目をそらした。

「そんなことはない。君はまだ若いよ。」

「さう言つて頂くと、それは女だから嬉しいわ。でも私が決心するまでにどんなに考へ込んだか、とてもお話できないわ。本当は電話をおかけしてみても思つたり、やつぱりお目にかからない方がいいと思つたりしてゐたの。でも上の娘が大学の受験期で、いつもあの時間にテレビをかけるんです。すると、あなたが目の前にゐるんですもの。今日も、本当は外の用で出たんですけど、タクシーの運転手が見つめてゐると言つたもので、ついあそこまで行つて見たんです。さつきは、私、身体が震へてゐたの。とても怖しいことをしてしまつたやうな氣持で、口も利けなかつた。」

さう言つて、露子は溜め息をついた。するとその不安が妻に対する警戒心となつて圭三に移つた。

十年ほど前に、彼が芸者と關係ができたことが妻の芳子に知れて家庭が不安に陥つたことがあつた。病弱で神経質な芳子は、彼がその芸者と關係を絶つてからもその不安に怯えつづけ、ノイローゼになつて三月ほど入院した。その間に、妻の不安がそのまま彼自身の日常の不安となつた。

彼は街を歩いてゐても、絶えず、妻はいま自分があの女と逢つてゐると思つてゐるかも知れないといふ怯えに悩まされ、一年ほど仕事を手につかなかつた。彼自身もノイローゼになりかかつてゐたのだ。その時の不安に似た暗い影が、

彼の心に波立つて来た。

「で、どういふ話なの？」

彼は、露子の持つて来た話を聞きたかつた。しかも、予めその話には脅かされてゐた。

「理一のことですの。」

リイチといふ言葉を聞いたとき、圭三はそれがあの子供の名であることを悟つた。彼は子供の名前すら姉から聞いてゐなかつた。もらつた先では、その家で生れたことにして名前もつけ、ミルクで育ててゐるといふことを彼は耳に挟んでゐた。もしさうなら、その子は本当の親に育てられてゐると同様だから、実の親を知らぬ方が仕合せなのだと彼は考へることができた。だが露子が彼と同じ考へ方をするのができないでゐたことは、いま露子の口にした理一といふ名の言ひ慣れた発音から分つた。

「いま、どこにゐるの？」と彼は、その子は、とまで言ふことができずに、訊ねた。

「大学生で、東京にゐるんです」と言つて露子は、圭三の冷淡さに躓いたやうに言葉を切つた。圭三は息をとめ、身体を固くして沈黙した。

露子は、Sといふ私立大学の名前と、その子の下宿のあ、る町の名前を言つた。

「私に電話をよこしたんです。誰かに聞いたんですね。ち

やうど家中が留守のときだったからよかつたの。私、すぐ行つて逢ひましたわ。またそんなことをされたら困るんですもの。」

そのとき、ボーイがスープを持つて来た。二人ともしばらくその皿に手をつけなかつたが、スープを置いて行つたボーイが圭三の斜め向うの室の隅からこちらを注視してゐるのを氣にして、彼はスプーンを取つた。すると露子もスプーンを取つた。食べながら露子は、目を伏せたままで言つた。

「千田さんといふ家は、あなた御存じでせうが、あの近くでの、かなり大きな牧場主なんです。だからあの子も品よく育つてゐますわ。背は一六五センチもあるでせうか、あなたぐらゐなの。でも私たちのことが分つてから、ずいぶん悩んだんですつて。そのことをあの子は千田さん御夫婦には内緒にしてゐるのよ。一年に一度ぐらゐ私に逢ひたいし、あなたにも一度逢つてみたいんですつて。」

土谷圭三はスプーンを置いて顔を挙げ、露子に目を注いだ。露子は彼の方を見上げ、また目を伏せて言つた。

「いいえ、あなたのお名前や御身分のことはあの子は知らないやうだし、私も言ひませんでした。ただ父親が生きてゐるなら一度逢ひたいと言つてゐるだけですの。」

土谷圭三は食べかけのスープ皿を押しやり、額を二本の

指でもむやうにして肘をついた。頭が凝縮して固形物になつたやうな氣がした。物事はすべて楽に受け取らなければいけない、といふ、以前に彼のノイローゼから脱出したときの心掛けを、彼は取りすぎる一本の綱のやうに思ひ浮べてゐた。しかし逃れる道はどこにもありさうでなかつた。過去は執拗な狼のやうに彼の踵に食ひつかうとしてゐた。それなのに、その追ひつめられる恐怖のさ中に、その子に逢つて見たらといふ、ほとんど氣まぐれに似た想定が、ぽつかりと窓のやうに明るく前方に開くのを感じた。

「氣になさらないで下さいね。私、あなたのことを調べてあげるからとだけ言つたんです。それに私、ほんとに、こればかりも、あなたに理一のことで御迷惑をおかけしたくないんですの。」

さう言ふと露子は、ハンカチを出して鼻をかんだ。そして涙声でつけ加へた。

「私、本当は、あの子が元氣で育つてゐることをあなたにお知らせしたかつたんです。そして、私もお逢ひするのなら今がその時だと思つたんです。かうしてゐるのは、あなたの御家庭からも、私の家庭からも隠れてのことですけれども、もつと大きな目から見たら、かうしてお逢ひしてこの話することは許されていいことだし、それに。」

そこまで言つて露子は後が言へなくなり、涙を拭つた。

「よく分りました。君にばかり負担をかけて来て、僕は本
当に申しわけがない。千田さんといふ家に対して悪いこと
でなければ、僕もそれとなく逢つてみたい。」

圭三がさう言ふと、露子の目はまだ涙に濡れてゐるのに、
その顔には花が咲くやうな明るさが漲つた。

「さうして上げて下さる？ 私、うれしいわ。それに、何
も急なことではないんですから。」

「僕にとつては、たつた一人の子供だからね。」

圭三が笑顔でさう言ふと、露子は不思議さうに彼を見つ
めた。

「あら、お宅は子供さんがなかつたんですか？」

「うん。君のところは？」

「三人、女の子ばかりですの。高等学校と中学の三年と一
年です。」

「旦那さまはいい人なの？」

「ええ、まあ」と言つてから、狼狽したやうに露子の顔に
血がのぼり、まぶしい目つきをした。すると思ひがけない
嫉妬の念が圭三の胸にひろがつた。しかし彼は注意深く露
子の顔を見つづけた。そして彼は露子の恥らひの様子から
彼女が安定した結婚生活をしてゐるのだと推定することが
できた。いま感じたばかりの嫉妬の念とうらはらな祝福の
氣持が温い湯のやうに彼の心に湧いた。

「よかつたね、それは何よりだね。」

露子の顔から紅潮が消えた。そして、彼女は沈んだ口調
になつて答へた。

「楽な生活をしてゐるわけではないんですけど、主人はま
あ真面目な人ですから。」

その言葉の終りがまた棘になつて圭三の心を刺した。妊
娠したままの彼女を棄てて、自分が世に出る道を選んだの
は圭三であつた。

ボーイが食べ残したスープの皿を片づけて、次の皿を持
つて来た。

露子はピフテキを切つて食べながら、彼に話しかけた。

「私、またお役所の方へお電話してもいいでせう？」

圭三は大学に出る日と、研究所に出る日を知らせた。

「しかし、君も僕も、よつぽど氣をつけなくては」と彼は
言つた。その言葉で彼は、人目に氣を使ふといふことばか
りでないことを意味したつもりであつた。

「ええ」と真剣な目をして露子の方が目を見上げた。

食事が終ると、露子は時間を気にした。五時半になつて
ゐた。彼女は帰り支度をしはじめた。圭三は露子を下の待
合室まで送つて出て、見送つたあと、切符をコンファーム
してから、またそこに残つた。

彼は旅客の群の中に椅子を一つ占めて、はじめて落ちつ

いて煙草を喫つた。自分の子供が千田理一といふ名前の二十四歳の青年になり、いま東京にあるのだつた。それは慣れることの容易でない現実であつた。Sといふ名前の大学は、私立大学としては一流の学校であつたが、私立大学に入つてゐるといふのは、あまり頭のよい子供でないかも知れない。しかし田舎の高等学校を出て来たものとすれば、それが自然な学力の程度なのかも知れなかつた。露子にあ言つたのだから、いづれ彼はその子と顔を合せることになるだらう。その子の目に彼が卑怯な男として写ることは避けられなかつた。その子は父としての彼をゆるすのだらう。しかし、ゆるされた父としてその子の前にゐることを考へるのが彼には辛いことであつた。その上、人妻である露子と、ひそかに計画してその子に逢ふといふのも、彼には新しい不安の種であつた。妻の芳子が、そのことに気づく可能性があつた。一度だけならば多分隠しておくことができるだらう。しかし一度だけで済む筈がないと彼は考へた。そして、露子がその子のことで彼に逢ひたがつてゐたのと同様に、彼もまた露子に逢ふ口実をそのことに託すやうになる恐れがあつた。そして、かういふ事のすべてを打ちあけて話すべき姉はいま死にかかつてゐた。

土谷圭三は足もとにトランクを置いたまま、苦くなつた煙草を何本も喫ひつづけた。

飛行機はほぼ満員で、夏の北海道旅行に出かけるらしい派手な身支度の若い男女と、事務や取引の仕事でこの線に往復してゐる会社員や官吏らしい旅慣れた表情の男たちで占められてゐた。夜の十時に飛行機は千歳の飛行場についた。飛行場から札幌まで一時間ほど、バスは、真暗な闇をヘッドライトでギラギラと切り裂きながら走りつづけた。

姉が脳溢血で倒れたのは今年の正月であつた。甥の光作の手紙によると、発作は軽度のものであつたが、肝臓を悪くしてゐるので、恢復に暇がかかるだらうといふことであつた。二三月経つて春のはじめに、姉は床の上に起きてゐられるやうになつたが、記憶力が弱まり、古い知人などが見舞に来てと思ひ出せないことが多く、人が變つて子供のやうになつた、といふことであつた。

夫が死んだとき、久子はまだ四十代であつた。田舎の政治運動に熱中してゐた夫が、土地を抵当に借金を残してゐることが分つた。その頃圭三の妻の祖父が亡くなつて、かなりの額の遺産が入つたので、圭三はその一部分を流用して牟礼家の借金を整理してやつた。圭三の牟礼家への恩返しになるその融通については、妻の芳子も反対しなかつた。久子は、札幌の大学の農科を出たばかりの息子の光作を相